

横光利一のヨーロッパ認識と〈スペイン動乱〉の影響

河田 和子

一 はじめに

横光利一は、一九三六年二月から八月にかけて欧州を旅行したが、当初の予定ではスペインにも行く予定だった。しかし、スペインにおいて共和国側とフランコ將軍率いる反乱軍側とで国土を二分する内戦が勃発し、その影響で横光はスペイン行きを断念する。そのスペイン動乱に関する話題は、小説「厨房日記」（一九三七・一）や『旅愁』（一九三七・四）（一九四六・四）にも出てくるが、横光においてこの内戦はどういう意味を持っていたのか。

スペイン動乱は、ヨーロッパ列強の対立を鮮明に浮き上がらせたもので、作中にその話題を挿入したのも、この内戦をめぐるヨーロッパの国際情勢を意識してのことだろう。「厨房日記」は、その内戦の行方が注視され当時の知識人の関心も高かった時期に書かれている。『旅愁』（戦前版）も、第一篇から第五篇までスペイン動乱を意識した形で執筆されている

るが、内戦について触れているのは第三篇以降で、特に第四篇と第五篇においてスペイン動乱に関する具体的な話題が挿入されている。ただし、スペインの内戦自体、一九三九年四月一日に終結しており、『旅愁』執筆時においては過去の出来事となったスペイン動乱の話題が作中に挿入されている。それだけに内戦終結後も横光がこの動乱にこだわったのは何故か、その話題を挿入することによつたような意味があったのかということが問題になろう。

そもそも『旅愁』は、作中の時間と執筆時との間に時差があり、作中の時間設定は一九三六年春から一九三七年の〈支那事変〉勃発あたりまでだが、その連載中に第二次世界大戦も勃発している。特に第四篇、第五篇を書いたのは第二次世界大戦中、日本においては〈大東亜戦争〉最中であり、内戦終結後、既に四年が経過している。それだけに小説の作中の時間と執筆時期との時差を考慮する必要があるのだが、横光がスペインの動乱にこだわったのは、この内戦によつて欧州

の情勢も紛糾し、ヨーロッパの危機として欧州戦争Ⅱ第二次世界大戦に繋がることを認識していたからと見られる。

そこで本稿では、スペイン動乱に対する当時の知識人の反応も視野に入れながら、「厨房日記」から『旅愁』にかけてこの内戦の話題が挿入されていることの意味について検討する。作中でスペイン動乱がどう捉えられているのかを見ていくことで、この内戦が横光のヨーロッパ認識にどういった影響を与えたのかを検証し、『旅愁』における〈近代の超克〉のモチーフとの繋がりについても論及したい。なおスペイン内戦は、当時、動乱や内乱、革命とも言っていたが、ここでは欧州の情勢を揺り動かした点から〈動乱〉としておく。

二 スペイン動乱の影響と「厨房日記」

まず横光におけるスペイン動乱の影響と「厨房日記」の関わりについて見ていくが、先にこの内戦のあらましについて概観しておきたい。この内戦は、一九三六年七月一七日、スペイン領モロッコで正規軍が蜂起したことに始まる。翌日スペイン本土でも反乱軍が蜂起し、共和国政府（反ファシズムの人民戦線政府）側とフランコ將軍率いる反乱軍側とで国土を二分する内戦が二年半にわたり続くことになる。スペインに人民戦線政権が誕生したのはその年の二月だが、右翼側への圧力も強まったことで、その反動として反乱軍、特に陸軍

中心の正規軍が蜂起した。北部の大部分はその反乱軍の手に落ちるが、人民戦線政府を支持する労働者、民衆の抵抗により、首府マドリッドやバルセロナ、バレンシアなどでは反乱軍側を退かせ、戦線は膠着状態となる。この動乱によってヨーロッパの国際関係も紛糾し、フランスのブルム人民戦線内閣はスペイン政府に同情しつつも欧州戦争に拡大することを懸念してイギリスと共に不干渉の立場を取り、ドイツ、イタリア、ソビエト連邦に不干渉協定（反乱軍、政府軍双方に対し支援しないという協定）を承認させた。だが、それは表向きのもので、ファシズム体制のドイツとイタリアは反乱軍側への支援を継続し、ソビエトはそのことを理由に協定から離脱して人民戦線政府側の支援を続けていた。一九三九年三月末、マドリッド、バレンシアの陥落で人民戦線側は降伏、反乱軍フランコ將軍側の勝利で四月一日、内戦終結が宣言されたが、二年半におよぶ内戦はヨーロッパ諸国間の対立を先鋭化させることにもなった。

内戦勃発時、欧州旅行中の横光もそれに関するニュースを眼にしており、『歐洲紀行』（創元社、一九三七・四）の「スミス行」七月二二日の記述として「スペインの反乱拡大し、昨日は負傷者三千人との報があり、「私も行く予定であったのを延ばしたために事なきを得た」と記している。そのニュースは七月二二日のバルセロナにおける戦鬪に関するも

のである。『東京朝日新聞』一九三六年七月二三日夕刊の記事でも、バルセロナの戦闘で死者五百名、負傷者三千名と報じられていた。注意したいのは、横光はパリ滞在中に右翼と左翼の衝突を目的にしたりしており、その争乱との繋がり(3)でスペインの内戦も捉えていた点である。「巴里から帰つて」(初出「東京日日新聞」一九三六・九・三〇—一〇・二二、『歐洲紀行』収録)で、「人を見れば、右翼か左翼かどちらかだと判ずる觀念が、濃厚に全世界にはびこり、「スペインの争乱など、その觀念の争闘であることは、今は誰でも知つてゐる」と書いていたように、パリにおける右翼と左翼の対立がスペインに波及して内戦も勃発したと認識していた。

だが、「厨房日記」(「改造」一九三七・一、『歐洲紀行』収録)では、そうした右翼と左翼の対立を相対化して次のように捉えている。

フランスの全罷業が大波を打ち上げてやうやく鎮まりかかつたとき、スペインの動乱が火蓋を切つた。梶はヨーロッパが左右両翼に分れて喧喧囂囂としてゐる中を無難作にシベリアを突つ走り、日本へ帰るとすぐ東北地方へ引き込んだ。(略)日本人が血眼になつて騒いで来たヨーロッパの文化があれだつたのかと思ふと、それまで妙に卑屈になつてゐた自分が優しく哀れに曇つて見えて来るのだつた。(略)世の中はぜんたいどこへ行くのであらう。

(略) スペインの争乱が日日銃火を切つて殺し合ふ凶を思ひ描いても、思想の戯れの恐怖より錢欲しさの生活の頑固さが盜賊のやうに浮んで来るのであつた。／「全く右へ行くも左へ行くもあつたもんぢやないですね。これや食へる方へ行つてるだけだ」

スペイン動乱によりヨーロッパ諸国が左右両翼に分かれて紛糾している状況に対し、横光の身分的存在たる「梶」は、日本人が憧れ影響を受けてきた「ヨーロッパの文化」そのものに幻滅をおぼえている。「右へ行くも左へ行くもあつたもんぢやない」「食へる方へ行つてるだけ」というのは、右翼の反乱軍側と左翼の共和政府側に分かれて戦うスペインの状況を言っているが、同国にとどまらず、その内戦で「左右両翼に分れて喧喧囂囂」としているヨーロッパ列強を難じている。実際、スペインの内戦において、ドイツ、イタリアは右翼の反乱軍・フランコ將軍側を、共産主義のソビエトはスペイン政府側を援助し、ブルム人民戦線内閣のフランスは不干渉の立場を取りつつもスペイン政府側に同情的だつた。イギリスにおいては中立的立場を保持しつつ、ドイツやソビエトを牽制する狙いもあり、列強諸国間の思惑によりヨーロッパの情勢は紛糾していた。

そうしたヨーロッパ諸国間の対立をイデオロギー、思想上の対立というより、「錢」欲しさ、即ち実利的な問題、利害

関係が絡むものとして「梶」（＝横光）は見ていたのだが、フランコ將軍側、スペイン政府側双方とも相対化し、右翼対左翼といったイデオロギーの対立そのものに否定的な見方を示している。つまり、ファシズムか反ファシズムか、共産主義か反共産主義かといった対立的見方を排する形で、思想より「錢」といった実利的な問題がこの内戦に絡んでいっているものと認識していた。実際ソビエトや当初のフランスはスペイン政府側に義捐金を送っており、そうした情報も日本の新聞や雑誌で報道されていたから、横光はそのことを踏まえて内戦にヨーロッパ列強の利害関係が絡むことを強調したのである。

スペイン動乱自体、右翼と左翼の抗争と見るわけにはいかない側面もあり、元スペイン公使の青木新も、「改造」一九三六年一〇月号に掲載された座談会「スペイン革命を繞りて」（九月四日 東京会館）で次のように述べていた。

「単純にこれを左右両翼の抗争とのみ見るべきものではないからうといふやうなことのお話をして見たいと思ひます。（略）スペインは昔からカトリック教の国であるからして、（略）その弊害も非常に大きくなりましたから、共和主義者、革命主義者らは何時もカトリック教会の権力を削ぐといふことを大目的として居つたのであります。（略）（引用者注、左翼共和政府は）その他労働者保

護問題であるとか、カタロニアに自治を与へて、地方分立の端を開いたといふやうなことは非常に右翼方面の感情を害して、右翼方面の反対を招いた訳であります。」

青木は内戦の根因として、宗教や労働問題、異文化の民族に絡む地方分立の問題もあることを指摘していた。そのように様々な要因が絡んでいることを横光も認識していたから、「厨房日記」では、右翼対左翼、即ちファシズム対反ファシズム、反共産主義対共産主義といった二項対立的な見方を相対化し、いずれの側にも利権（＝錢）が絡むものとして難じていたのである。つまり、左右両翼のいずれにも組さない中立的立場からスペイン動乱の話題を作中に挿入していたのだが、そうした横光の態度は、内戦に対する他の知識人の反応とも異なる所がある。そこでスペイン動乱に対する日本内外の知識人の反応についても見ておく必要がある。

三 スペイン動乱に対する知識人の反応

内戦当時、その状況は日本の新聞や雑誌メディアにおいても逐次報道されており、特に一九三六年九月から一九三七年前半にかけて、スペイン関連の記事が多く掲載されていた。前に挙げた座談会「スペイン革命を繞りて」もその一つだが、「改造」や「中央公論」等の総合雑誌には、その現地報告や内戦をめぐるヨーロッパ情勢を分析した評論が度々掲載され

ていた（参考）として付した「日本におけるスペイン動乱
関連の雑誌記事一覧」を参照）。そうした中で「厨房日記」
が書かれたことの意味を考える必要もあるう。

スペイン動乱に対する関心が高かったのは、その内戦が欧
州戦争、ひいては第二次世界大戦を惹起するのではないかと
危惧されていたからである。国際法学者の横田喜三郎は「ス
ペイン動乱をめぐる紛糾の全ヨーロッパ政局」（『日本評論』
一九三六・一〇）で、スペイン動乱により「ヨーロッパの国
際関係が極度に紛糾し、第二の世界大戦を惹起するに至るや
うなことはないか。」と述べ、次のようにヨーロッパ情勢を
分析していた。

現在においてヨーロッパの有力な国家で左翼的な政府を
有し、その意味で左翼的な国家と言へば、疑もなく、ロ
シアとフランスである。（略）これらの国家は自然にス
ペインの左翼的な現政府に好意をもち、これに対して援
助的な行為をすることも必ずしも辞しない。（略）これ
に対して、右翼的な政府を有し、その意味で右翼的な国
家として有力なものは、言ふまでもなく、ドイツとイタ
リーである。（略）この間にあつて、比較的に中立的な
態度をとつてゐるのはイギリスである。（略）スペイン
における右翼対左翼の動乱は全ヨーロッパに影響してそ
の右翼の諸国家と左翼の諸国家の対立を深刻ならしめる

と共に、この深刻化された対立においてそれらがまたそ
れぞれスペインの動乱に働きかけてゐるといふ極めて複
雑にして紛糾した事態を現出してゐるのである。

スペイン動乱は、左翼の人民戦線政府に好意的なロシア（ソ
ビエト）、フランスと、右翼のフランコ將軍側を支援する
ドイツ、イタリア間の国際的対立を激化させ、第二次世界大
戦を惹起するのではと危惧されていた。実際、第二次世界大
戦（第二次欧州大戦）の勃発は一九三九年九月、ドイツ軍の
ポーランド侵攻を発端とするが、それはスペインの内戦がフ
ランコ將軍側勝利で終わった五ヶ月後である。

そのように内戦当時、世界情勢を左右するものとして左翼
の人民戦線政府側と右翼の反乱軍側のいずれが勝つか、国家
を二分する戦いの行方が注視されていただけに、スペイン動
乱に対する知識人の関心も高かった。そうした時期に「厨房
日記」も書かれたのだが、内戦当初、日本内外の文学者、知
識人の間ではスペイン政府側に同情するものも少なくなかつ
たことは注意したい。雑誌「セルパン」では、一九三七年五
月と七月号にスペイン特集を組み、「中央公論」の一九三七
年六月号でも「ルポルタージュ 嵐の西班牙」という特集で
スペイン動乱に対する欧米の知識人の反応を紹介していた。⁵⁾
ファシズムの反乱軍、フランコ將軍側に対する民衆の戦いと
して、スペインの人民戦線側や援軍の国際義勇軍を支持する

主張も多く見られ、後者の「中央公論」にはアンドレ・ジイド「スペイン民衆における言葉——マニフェスト——」⁽⁶⁾やトリストラン・ツアラ「自由の前哨戦をゆく」⁽⁷⁾が掲載されている。〈支那事変〉勃発前の日本でこうした特集が組まれること自体、反ファシズムの立場から人民戦線側に同情していた知識人が比較的多かったことを示しており、「嵐の西班牙」の訳编者たる小松清も、その前書きで欧米の「インテリゲンチヤの切迫した『良心の表示』」は「烈しく我々の心をうつもの」と記していた。

「厨房日記」では、「もう良識は左翼以外にはない。それは決つた」というトリストラン・ツアラの言葉も引用されている。欧州旅行中、ツアラと会見した時のことが回想されており、『歐洲紀行』の「スミス行」にも六月一二日に画家の岡本太郎と一緒にツアラの家を訪問したことが記されているが、その時のことを「厨房日記」に書いているのは、日本の文学者や文化人に影響を与えたヨーロッパの知識人が反ファシズムの立場から左傾する状況に疑念を抱いていたからである。⁽⁸⁾特にスペインの内戦は、フランスの知識人の左傾化に拍車をかけたのだが、左翼に「良識」があるとする見方そのものに横光は懐疑的だった。それ故「厨房日記」でも、ツアラの言葉を想起し、「ある古い言葉を耳にしたときのやうな無表情」な気持ちを抱いたことを記している。

かつてプロレタリア文学に対抗する形で新感覺派を標榜した横光であれば、フランスの知識人達の左傾に疑念を抱くのも当然だが、特にこの時期、「文化国」の「最大の理由は、その国の伝統にある」(『歐洲紀行』収録の「人間の研究」、初出「東京日日新聞」一九三七・一・一〇〜一四)と考えていたことも関係している。横光は、日本のみならずヨーロッパの伝統を尊重する立場からジイドの左傾にも失望感を抱き、「世界第一の文化国の、最も偉大な知性であるところのデイドが、ロシアの精神上の植民地にならうとして」おり、「フランスの伝統の精神の世界における訓練は、そのやうに軟弱なものであつたのか」と難じている。⁽⁹⁾そうしたフランスの知識人に対する失望が、ヨーロッパの文化、知性に対する幻滅に繋がっていたと考えられる。

ただし、左翼に批判的であつても横光自身ファシズムを是認していたわけではない。むしろ左右両翼のいずれにも組せず、そうしたイデオロギーの対立を相対化する形で「厨房日記」は書かれている。つまりスペイン動乱において二項対立的な認識、その対立的思考の構造を問題にしていたのであり、左傾するヨーロッパの知性に幻滅を感じるとともに、ヨーロッパ情勢の危機を認識していた。だから「厨房日記」では、スペイン動乱を話題にしながら「ヨーロッパの知性」、二項対立的な思考を相対化し、そうした思考に回収できぬものと

して「日本の知性」や「種族の知性」が説かれている。そこに日本に対する祖国感情も垣間見られるのだが、そうした問題の延長線上に『旅愁』も書かれている。

四 『旅愁』における時差と内戦の事後の認識

そこで『旅愁』（戦前版）においてスペイン動乱がどう捉えられているかを見ていくが、作中の時間と執筆時の（時差）に留意したい。作中の時間は一九三六年春から翌年七月の（支那事変）（盧溝橋事件）勃発、および第二次上海事変前後（八月）の話として設定されている。その執筆時期を整理しておくくと、第一篇は一九三七年四月一日から八月六日にかけて「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載後一時中断して一九三九年五月から七月にかけて「文芸春秋」に発表され、第二篇は一九三九年八月から一九四〇年四月にかけて「文芸春秋」に連載されている。第三篇は、一九四二年一月から一二月にかけて「文芸春秋」に連載され、第四篇は一九四三年一月から一九四四年二月にかけて「文芸春秋」と「文学界」に、第五篇は一九四四年六月から一九四五年一月にかけて「文芸春秋」に発表されている。スペイン動乱の具体的な話題が出てくるのは第二次世界大戦中に書かれた第四篇と第五篇であり、内戦も終結して四年が経過している。

そもそも、第一篇の執筆時、スペインの内戦は継続中でそ

の間に（支那事変）も勃発する。第二篇は内戦終結後に書かれているが、作中の時間は内戦前の話になっており、その第二篇の執筆中に第二次世界大戦が勃発する。そうした時差を意識しながら読者は『旅愁』を読んでいくことになるのだが、スペイン動乱のことは第一篇から意識して書かれている。それはスペインを見たかと思ふ千鶴子から問われた矢代がぜひ見たいものだと思ふと答える場面があることからもうかがえるし、第二篇では、久慈と真紀子が「マルセーユ廻りでスペインへ旅立つた」ことが書かれている。そして第三篇において、久慈から矢代宛の手紙で「スペイン行き途中、反乱勃発のため引き返し」スイスからイタリアへ行ったことが伝えられるが、それは第二次世界大戦最中に執筆されている。即ち、執筆時においては事後となった出来事、歴史的事件を追いかけていく形で『旅愁』は書かれており、スペイン動乱のくだり自体、世界大戦勃発の導火線となった内戦だという認識から描かれている。

内戦に関する具体的な話題が出てくるのは第四篇と第五篇だが、いずれも欧州から帰国した日本人達の間でなされている。特に第四篇では、パリから帰国した若い外交官の速水が「スペインの内乱」について次のように語る場面がある。

その中の一番最近にパリから帰つて来たといふ若い外交官が、傍の佐佐といふ画家に突然云つた。／＼「そら、あ

のクーポールにゐたスペイン人のボーイね。よく僕らの傍へ来た男があるぢやないか。あれがね、新聞を見てゐて僕に、もうかうしちやゐられない。自分の方は負けて来た、いよいよ自分も祖国へ帰つて戦ふ、と決然として云つたよ。どうもあれは、反フランコ派の方らしいんだが、(以下略) / (略) 矢代は黙つて聞きながら、クーポールにゐたスペイン人の顔をあれこれと思ひ泛べるのだつた。そして、もし自分の国がそんな状態になつたら、自分もやはり千鶴子のことなどもう考へてはゐられなからうと思つた。パリにゐる当時、たとい嘘だつたとはいへ、日本と支那とが戦争状態に這入つたといふニュースの大きく出たことがあつたが、自分も帰つて直ちに戦ふ覚悟をしたその日のことを思ひ出した。(略)

/ 「しかし、どうも支那も危くなつて来てゐるね。スペインの内乱と支那の今度の内乱とは関係があるよ。」 / とかう云ひ出したのは由吉だつた。(略) 「スペイン事件が東洋で起ると、今度の蒋介石の西安事件みたくになるんだね。だんだん蒋介石も共産党に引き摺られて行つてゐるらしいんだが、さうなれば結果は抗日思想がますます高まるから、どうしてもこれは、日支戦争が避けられないといふ風に拡がるよ。」

スペイン人のボーイが祖国の内戦に参加するため帰国したこ

とが述べられているが、このボーイは戦況も不利になつてきた「反フランコ派の方」とされている。つまり、スペイン政府側⇨人民戦線側の者も、愛国心、祖国感情から内戦に身を投じていく話が語られているのだが、そうした話題が『旅愁』に挿入されたのはどうしてか。それは内戦において、イデオロギーの対立よりも、そうした思考的対立に回収できぬ祖国感情を問題にしたからと考えられる。

実際、スペインの内戦で、人民戦線側、即ち共和国陣営側の者も愛国心ゆえに戦つた側面があり、ピエール・ヴェイラー / 立石博高・中塚次郎 訳『スペイン内戦』(原著一九八六年 白水社、一九九三・六) によれば、「共和国陣営には事実上、共通の『教義』も『イデオロギー』もな」く、「共産主義者の抱く理想」の中には「第三インターナショナルとソビエト連邦への同胞愛、そして愛国的戦争が混在し」ていとされる。特にカタルーニャ(カタロニア)やバスクの自治を主張するグループは、共和国陣営としてフランコ側と戦つたが、彼等はイデオロギーよりも愛国心、パトリオティズムというべき祖国感情によつて戦つていた面があつた。それと同じく、『旅愁』で話題にされるスペイン人のボーイも、祖国感情ゆえにフランスから帰国して内戦に参加した一人として語られており、人民戦線側も愛国心、祖国意識によつて戦つてゐる面があることを強調する描き方になつてゐる。だから、

その話を聞いていた矢代も、日本が戦争状態になったら、恋人の千鶴子のことも考えておられず、祖国の為に戦う覚悟をしたことを回想する場面が描かれているのである。

なお前の引用で、「スペイン事件が東洋で起ると、今度の蒋介石の西安事件みたくになり、それが「日支戦争」に「支那事変」に繋がるかと思われているあたり（作中では「支那事変」前の認識として描かれているが）、事変勃発後の認識によって書かれている。西安事件とは一九三六年一月二日に中華民国西安で起きた張学良らによる蒋介石拉致監禁事件のことで、スペイン動乱に類似するというのも、国民党と共産党の対立によって生じた内乱だったことによる。スペイン動乱と「支那事変」とを繋げて捉える見方自体、事変勃発後に見られた議論であり、朝日新聞社のパリ特派員だった重徳泗水は「スペイン内乱」はどこへ行く」（改造）一九三七・一〇）で、「支那事変は第二のスペイン」で「イデオロギイと利害関係とにより動かさるる列国抗争の舞台」となっていると述べていた。後述するように、この西安事件の話題は『旅愁』第五篇にも出てくるが、横光は「支那事変」勃発前後の一九三七年当時の見方、認識を反映しながら、執筆時Ⅱ第二次世界大戦、（大東亜戦争）中の事後的視点からその歴史的事件を捉え直す形でスペイン動乱の話題と繋げている。『旅愁』では、そうした形でスペイン動乱を導火線としてヨーロッパ

の争乱のみならず（東洋）においても日支の紛争が拡大していく様を描いている。別言すれば、対立そのものが世界的に拡大していくことを登場人物たちも認識していく装置として、スペイン動乱の話題が挿入され、その動乱を発端とした世界的対立の構図が描き出されているのである。

このように、スペイン動乱の話題に繋げて世界的な対立へと紛争が拡大する様を描き出されていくのも、『旅愁』が第二次世界大戦下において書き続けられたからだだが、この小説は（大東亜戦争）最中の「近代の超克」論議にも呼応して書かれている。そこでスペイン動乱と「近代の超克」のモチーフがどう関係するのかについても考えねばならないだろう。

五 二項対立的な世界認識とその超克

『旅愁』作中では、スペイン動乱の話題がヨーロッパの危機を象徴するものとして挿入されており、第四篇において、その内戦に対し東洋主義者の東野が次のように「世界戦争の始まり」だと発言する所がある。

帰朝者から報道洩れのスペインの内乱に関する新しい話を、誰も一番に聞きたがった。平尾男爵はイギリスの新聞や噂から拾った各国の武器の注入状況とか、スペイン人自身の、二階と階下に別れた兄弟同士の銃で撃ち合ふ物凄い有様とかを、問はれるままに語つてゐた。／＼と

にかく、あれは世界戦争の始まりだよ。もう戦争は起つてゐる。対岸の火事ぢやないよ。」／かう横から一口云つたのは東野だつた。(略)「ヨーロッパももう底を突いた。今度こそはいよいよ東洋の勃興だよ。(以下略)」

「二階と階下に別れた兄弟同士の銃で撃ち合ふ物凄」光景は、実際の内戦でもあり得たことだが、ここではイデオロギーの対立により兄弟間で血を流す壮絶な戦いの悲惨さが語られている。この場面の初出は「文芸春秋」一九四三年七月だが、「世界戦争の始まり」という東野の言葉からも、スペイン動乱が第二次世界大戦の導火線になつてゐるという認識のもとで書かれてゐることは言うまでもない。だから、横光は内戦終結後もこの内戦にこだわり、作中にその話題を挿入してきたのだが、注意したいのは、東野が「ヨーロッパももう底を突」き、「いよいよ東洋の勃興だ」と発言していることである。「東洋の勃興」を説く点では(大東亜共栄圏)を理念とした(大東亜戦争)時の認識が示されてゐる所だろうが、「ヨーロッパももう底を突いた」という認識自体、一九三七年時において、ヨーロッパの危機が意識されてゐたことを反映してゐる。そこで想起されるのは、一九三七年当時、ヨーロッパの危機について述べていたドイツの文化哲学者エドワード・シュプランガーの講演「西洋文化の没落か、復興か」(「日本評論」一九三七・三)である。同講演では、スペイン動乱と関連づ

けた形でヨーロッパ没落の危機について次のように述べていた。

ヨーロッパの国々が——特にスペインの事件以来相對する二つの集団に分れ始めてゐるが、この傾向が恒久的な將來の形勢(形態)を暗示してゐるのか、或は吾々がなほ改造、改鑄の過程の中にあるのかは、今日は是を預言する事は未だ出来ない。(略)ヨーロッパの状況は見透しのつかぬものとなつて了つた。全体の組織が動いて行くためには、数百万の齒車が互にかみ合はなくてはならぬと云つた様な有様である。総てのものは、人為的の秩序、人為的の操縦に従ふべく定められてゐる。総てのものは合理化されてゐる。(略)かゝる状態から救はれる第一の道は「機械的な考へ方」に根本的な誤りがあるのだと云ふ事を想起する事である。(略)スペインの現状はヨーロッパが直面してゐる危険の大きさを示してゐる。(略)今日の重大問題は、破壊的な戦争へと進まなくてはならないか、或はこの極端なる事態をなほ避け得られるか、と云ふ点にかゝつてゐる。

シュプランガーは一九三六年一〇月から一年間日独交換教授として日本に滞在し、東京帝国大学等で講演を行った。その時の講演を翻訳したのが「西洋文化の没落か、復興か」(小塚新一郎訳)である。西洋文化がいかなる没落の兆候を示し

ているかということ述べたもので、スペイン動乱以来、ヨーロッパ諸国の直面している危機として「相對する二つの集團に分れ始め」、ファシズム対反ファシズム、共產主義対反共產主義といった対立も激化し、そうした二極対立の傾向が恒久化して「破壊的な戦争」へと進むのか、それとも「改造、変化の過程」にあるのか、予測困難な状態にあることが説かれていた。

この講演は〈近代の超克〉論者の亀井勝一郎にも影響を与えたものであり、横光もこの講演を意識した上で先の東野の発言を書いたものと考えられる。それは『旅愁』第五篇で日支の戦争が実際に勃発し、矢代が東野の発言を想起して次のように述べられていることから言える。

戦争はもう起つてゐるよ、本当の平和は戦争だ。と、アメリカを廻つて来た東野が、入港して来て横浜へ降りるなり、スペイン反乱の有様をさう云つた日のことなど、矢代は思ひ出したりした。鹽野と街を歩いてみた去年の晩秋、西安で蒋介石が誘拐されたといふことを聞いたときふと自分の運命に影響を及ぼしそうな突風を身を感じたことも、さらにまた彼は思ひ出すのだつた。一ヶ所の戦争はそこだけで鎮る筈もない。(略) 視れば、ヨーロッパのどこも発火点で充ちてゐた。怨恨つみあがり、鬱情す走る十重、二十重の心根の複雑さを、機械の食い破

つてゆく日が来たやうであつた。民族も宗教も、政治も経済も、文明も思想も、ばりばりと齒車の齒の中にめり崩れて行きさうだつた。

スペインの内戦で紛糾するヨーロッパを「機械」や「齒車」という言葉で表現しているが、この二語は「西洋文化の没落か、復興か」の翻訳にも出てくる。つまり、『旅愁』のこのくだりは、シュブランガーの懸念したような「機械的な考へ方」によるヨーロッパの危機「破壊的な戦争」による没落が、執筆時(＝大戦下)において現実のものになつたという認識から書かれており、一九三七年時の国際情勢が世界大戦下の認識から捉え直されている。ここでは、スペイン動乱によるヨーロッパの「火の手は東洋の両面へも迫つて」、西安事件さらには日支の戦争を勃発させたという認識が示されているのだが、その「発火点」が機械的思考に起因していることを「機械」や「齒車」といった表現で表している。前述したように、東野の「東洋の勃興」もこうしたヨーロッパの危機を意識した上で説かれていたのだが、それは執筆時の東洋対西洋の相克(＝大東亜戦争)下の認識を反映したものととなっている。

このように、「旅愁」では、世界大戦の導火線として、またヨーロッパの危機を象徴的に表すものとしてスペイン動乱の話題を挿入し、その危機の根因が近代の機械的思考＝科学

の合理主義にあることを問題として描いていた。そうしたヨーロッパの危機と機械的思考の問題自体、(近代の超克)論とも関わっており、「文学界」一九四二年九月、一〇月号のシンポジウム「近代の超克」でも西洋の近代の超克とともに(機械)批判がなされていた。横光はその論議と呼応した形で、機械的思考や二項対立的な枠組みを乗り越える思考基盤を「古神道」において思索している^⑧。

そもそも、『旅愁』第一、二篇では、パリを舞台に西洋派の久慈と日本派の矢代が議論し、その思考的対立を相対化する形で、ヨーロッパの影響を受けてきた日本の知識人の問題が描かれていた。が、第三篇以降、日本に帰国した矢代に焦点が当てられ、スペイン行きを中止した後の久慈のヨーロッパにおける動静は描かれない。それはスペイン動乱の影響で紛糾するヨーロッパ情勢の中、久慈のヨーロッパ主義もどういう方向に行くのか、行方知れずになっていることを示している。一方、矢代の方は、キリシタン大名大友宗麟によって先祖が滅ぼされた因縁から、千鶴子の信仰するカソリックと如何に折り合いを付けるかで苦悶し、信仰上の相違、宗教上の対立に折り合いをつけるものとして「一切のものとの対立といふことを認めない、日本人本来の希ひ」として「古神道」を見出すことになる。さらに久慈の信奉する科学主義との折り合いもつけるべく、自然科学の認識を融和させた幣帛数学

一致論も考えられたりするのだが、そうした形で「古神道」による近代科学(=機械的思考)の超克が思索されていく。

『旅愁』で展開される「古神道」自体、相対立する原理(キリスト教や科学)を融和、総合する志向を象徴的に表わしたものであり、二項対立的認識を乗り越える思考基盤として思索されている。そうした二項対立的思考の問題は、作中、数学上の定律とされる「排中律」の議論にも反映されているのだが、そうした枠組みを超克する思考基盤を横光はなぜ日本の「古神道」に求めたのか。その根底に祖国感情の問題もあることは見落とせまい。矢代は、パリにいても故国日本に「いとほしさを感じ」、「どんなに世の中がひねくれたつてかまはない、日本だけは滅んでくれちゃ困るとひそかに思」い、国境に向かうシベリア鉄道の旅でも、「祖国」と胸の奥で呟いたりする。そうした祖国感情は、愛国心というよりパトリオティズム(=愛郷心)というべきものだろうが、その心情が祖先崇拜的な「古神道」と結びついたのだと考えられる。

前述したように、『旅愁』でスペイン動乱にこだわっていたのも、その内戦がヨーロッパの危機意識、さらには第二次世界大戦を惹起したという認識があったからだだが、横光自身、内乱による祖国の分裂を厭う心情があったと思われる。巴里祭でみた右翼と左翼の衝突に対し、矢代は「争ひあれば云ふだけ云つて自然な一つの言葉で鎮まり返」る「日本は健康」

だと考えているが、そこに左右両翼の争いを忌避する心情が垣間見られる。横光にとつては、レジスタンス運動としての人民戦線も認めがたいものだったのだろうし、欧州旅行中、巴里祭での右翼と左翼の衝突やスペイン動乱の状況を知ること、日本への祖国感情はより強まったのではないか。戦後、横光は「微笑」（「人間」一九四八・一）でも、「勤皇と左翼の争ひ」を「排中律の問題」と結びつけて考え、「戦争といふものの善悪如何にかかわらず祖国の滅亡することは耐えられることではなかつた」と書いている。そうした点から考えるなら、横光が〈大東亜戦争〉を認容したのも、二項対立的思考では捉えきれない祖国感情がその根底にあつたのだろう。

とはいえ、横光は『旅愁』においてスペイン動乱から第二次世界大戦に至る国際情勢を見据えた形で書いている。激動する世界情勢の中にありながら、過去の事件も執筆時の認識から捉え返しながら『旅愁』を書き続け、二項対立的な世界認識の枠組みを超越する新たな思考を模索していた。だからこそ、この小説において第二次世界大戦前夜の世界情勢のダイナミズムが表されているのであり、そこに時代の変化に真つ向から向き合おうとした横光のアクチュアリティもあつたのだと言えよう。

〔参考〕

日本におけるスペイン動乱関連の雑誌記事一覧

（内戦勃発〜第二次世界大戦期）

（凡例）

一、スペイン内戦勃発時（一九三六年七月）から第二次世界

大戦終結（一九四五年八月）まで日本の雑誌に掲載され

た内戦関連の記事を調査し、発行年月順に列挙した。

◎はスペイン内戦に関する特集号（タイトルおよび掲載誌、発行年月は太字）、○は座談会を示す。

一、記事の著者（座談会は参加者全員）、タイトル、掲載誌名とその年月（号）を記し、著者名は掲載誌の表記にしたがった（記事により表記が異なるものもある）。

・鈴木武雄「西班牙紀行——マドリイとセヴィリア」〔改造〕一九三六・九

・「世界情報 スペイン動乱前奏曲」〔改造〕一九三六・九

・鈴木東民「スペインの動乱と欧州の対立」〔改造〕一九三六・九

九）

・増田豊彦「スペイン動乱とその国際的投影」〔中央公論〕

一九三六・九

・笠岡栄雄「スペイン動乱の背景」〔文芸春秋〕一九三六・九

- ・木下半治「西班牙動乱と人民戦線の将来」〔「文芸春秋」一九三六・九〕
- 青木新・木村毅・布利秋・町田梓楼・美濃部亮吉・横田喜三郎(座談会)「スペイン革命を繞りて」〔「改造」一九三六・一〇〕 同号の特輯グラビアは「スペインの内乱」
- ・「世界情報」スペイン動乱彙報〔「改造」一九三六・一〇〕
- ・立作太郎「西班牙動乱を繞る国際法問題」〔「中央公論」一九三六・一〇〕
- ・E・ウォルガ「革命スペインの基本的分析」〔「中央公論」一九三六・一〇〕
- ・柳澤健「西班牙を想ふ」〔「中央公論」一九三六・一〇〕
- ・横田喜三郎「スペイン動乱をめぐる紛糾の全ヨーロッパ政局」〔一九三六・一〇〕〔「日本評論」〕
- ・板倉進「西班牙内乱の両巨頭」〔「日本評論」一九三六・一〇〕
- ・堀口九萬一「スペインの動乱」〔「日本評論」一九三六・一〇〕
- ・B・E・R「スペイン動乱と新聞——新聞時評——」〔「日本評論」一九三六・一〇〕
- ・イリヤ・エレンブルク「マドリイドを馳ける」〔「文芸春秋」一九三六・一〇〕
- ・保田與重郎「文芸時評 法王庁の発表」〔「日本浪曼派」一九三六・一〇〕
- ・「世界情報」スペイン両軍の構成」〔「改造」一九三六・一一〕
- ・三波利夫「明日を逐ふて——文芸時評——」〔「三田文学」一九三六・一一〕
- ・横田喜三郎「スペイン内乱の国際的渦紋」〔「中央公論」一九三六・一一〕
- ・田中直吉「欧州国際政局の変動」〔「日本評論」一九三六・一一〕
- ・板倉進「西班牙内乱の新展開」〔「日本評論」一九三六・一二〕
- ・林房雄「宅間ヶ谷雜記」〔「新潮」一九三六・一二〕
- ・龜井勝一郎「古典美への誘惑者」〔「文学界」一九三六・一二〕
- ・保田與重郎「法王庁の発表について再び」〔「コギト」一九三六・一二〕
- ・延島英一「無政府主義者とスペイン内乱」〔「日本評論」一九三七・一一〕
- ・鈴木東民「独逸の植民地要求とスペイン問題」〔「改造」一九三七・一二〕
- ・板倉進「スペイン内乱と列国の干渉」〔「中央公論」一九三七・一二〕
- ・「世界情報」スペイン動乱のその後／スペインをめぐる各国の最近の動静」〔「改造」一九三七・三〕
- ※エドワード・シユプランガー／小塚新一郎訳(講演)「西洋文化の没落か、復興か」〔「日本評論」一九三七・三〕にもスペイン内戦に関する言及あり

・荒畑寒村「スペイン内乱参戦記」〔改造〕一九三七・四)
・アルマンド・ボアヴェンツウラ「フランコ將軍の陣營を訪ふ」〔日本評論〕一九三七・四)

・筑紫明「植民地再分割戦としてのスペイン内乱」〔日本評論〕一九三七・五)

・内山敏「スペイン地獄絵巻」〔日本評論〕一九三七・五)
◎特集〈スペイン〉〔セルパン〕一九三七・五)

アンドレ・マルロオ「スペイン現地の報告」
パリ特派員 福永英二「スペインから帰つたマルロオと語る」

T・S エリオット「スペイン革命と政治思想の退廃」
フランソワ・モオリヤツク「スペインの悪霊」

〔記事〕「救はれた首府の美術品」、「スペインは恰かも各国空軍の性能実験場」、「スペイン戦線に立つイギリスの知識人と文学者」

◎小松清訳編 特集〈ヘルポルタージユ 嵐の西班牙〉〔中央公論〕一九三七・六)

アンドレ・ジイド「スペイン民衆におくる言葉——マニフェスト——」

ロマン・ローラン「世界の良心に訴ふ／同志への手紙」

イリア・エレンブルグ「昨日も、今日も、明日も」

シモンヌ・テリイ「マラガの悲劇」

アンドレ・ヴィオリス「マドリイドは生きてゐる」
トリスタン・ツァーラ「自由の前哨戦をゆく」

エリイ・フォール「ドン・キホーテは死んでゐない——マンガリータ・ネルケン——」

アンドレ・マルロオ「スペインでは人間の条件が鍛へられてゐる」〔訳は異なるが「セルパン」一九三七年五月号の「スペイン現地の報告」と同じもの〕

トロツキイ／マルロオ「スペイン問題をめぐる論戦」
・「世界情報 スペイン・ニュースふたつ／スペイン内乱とカザロス」〔改造〕一九三七・七)

◎特集〈スペイン〉〔セルパン〕一九三七・七)
アアネスト・ヘミングウェイ「伊軍敗戦の現地報告」

ステイーヴン・スペンダア「スペインに於ける民衆」
〔記事〕「叛軍グエルニカを空襲 フランコ軍、非武装都市に虐殺」

「イギリスはスペインに何を求めるか」〔ニュー・リパリティ〕紙から転載)

マックス・ブローマン「青年よスペインに行くな」
ベン・リイダア「スペインからの最後の手紙」

アンドレ・ジイド「私はスペイン人民の味方である」〔訳は異なるが「中央公論」一九三七年六月号の「スペイン民衆におくる言葉——マニフェスト——」と同じもの〕

※宮本百合子「文芸時評——国際作家会議——中国作家に課せられた重荷」(「報知新聞」一九三七・八・二六)で「セルバン」七月号の特集記事に言及

・三浦逸雄「スペイン文化面の新動向」(「新潮」一九三七・九)
・重徳泗水「『スペイン内乱』はどこへ行く」(「改造」一九三七・一〇)

・「世界情報 最近のスペイン戦況」(「改造」一九三七・一一)
・岡本鶴松「二つの世界的動きと西班牙内乱」(「中央公論」一九三七・一二)

・青木新「フランコ將軍とスペイン革命」(「改造」一九三八・一)
・板倉進「西班牙は何うなる」(「日本評論」一九三八・一 新年臨時号)

・伊東銳太郎「マドリッドのスパイ群」(「改造」一九三八・三)
・重徳泗水「フランスとスペイン」(「改造」一九三八・五)
・高岡禎一郎「フランコ將軍の印象」(「改造」一九三九・三)
・「欧州展望 スペイン戦争の終末」(「文芸春秋」一九三九・三)

・古谷晴彦「フランコ勝てり」(「日本評論」一九三九・四)
・アンドレ・マルロオ「従軍ルポルタージュ スペインの悲劇」(「中央公論」一九三九・六)

・齊藤直幹「フランコ治下のスペイン」(「改造」一九四一・六)

※内戦終結後のスペイン

注

(1) 横光の著作は、いずれも河出書房新社版『定本横光利一全集』を参照、『旅愁』本文も同全集の第八巻、第九巻の戦前版による。

(2) 松村良「横光利一『旅愁』の〈時差〉」(「国学院雑誌」二〇〇四・一一)でも作中の時間と執筆時の〈時差〉について論じ、「一九三六年から三七年の作品世界」の〈時間〉に「執筆時の〈時間〉が介入」していることを指摘している。

(3) 『歐洲紀行』「スキス行」には一九三六年七月の巴里祭前日と当日の様子が記されており、その時に「右翼と左翼の衝突」を見たことを反映する形で『旅愁』第二篇も書かれている。

(4) 横光の友人として、内戦勃発の際マドリッドに一番乗りした大阪毎日新聞社・東京日日新聞社パリ特派員の城戸又一がおり、『厨房日記』に登場する「ヨーロッパの政治に明るい特派員の友人」とは城戸のこと、横光は彼からスペインの情報を得た所も多かつただろう。

(5) 前に付した「〈参考〉日本におけるスペイン動乱関連の雑誌記事一覧」を参照。

(6) 一九三七年一月下旬、週刊誌『金曜日』^{ゾンドトク}に載ったものを訳載。同論文でジイドは「感嘆すべきスペインの民衆に、またマドリッド政権(引用者注、人民戦線政府側)に手をさしよるべ、

そしてスペイン権門の利権に反対し、ブルゴス政権（引用者注、フランコ政権）に反対するものである。」と人民戦線側の民衆にエールをおくった。

(7) 一九三六年一月二四日「ルガール」誌に掲載。ツアラは、マドリッドの戦鬪で反乱軍側を退かせたのは、スペインの民衆と彼等を助けるため世界各国から来た国際義勇軍との団結にあるとして、プロレタリアの団結による民衆軍の新たな組織が大きな力を持つと述べていた。

(8) 「スキス行」にはツアラの言葉は出てこないが、「ピカソが左傾をしてパステイユ騒動の壁画を描く」という噂が記されており、「厨房日記」にもその噂が挿入されている。

(9) 『歐洲紀行』の「スキス行」には、一九三六年八月一二日の夜と翌日の朝、モスコウ行きの汽車の食堂で偶然アンドレ・ジイドに会ったことも記されている。

(10) 城戸又一によれば「スペインの内乱のときに、やはり親と子、兄弟が、フランコ側とマドリッド側に分かれることはずいぶんあり」、一般民衆も「親戚なり、誰か身近の者がスペインの内乱に関連を持っている」状態だったという（座談会「スペイン市民戦争をめぐる」、『世界文学』一九六六・九、司会者は渡辺一民、参加者は城戸の他、阿部知二、荒正人、日野啓三）。

(11) エドゥアルト・シュブランガー、小塚新一郎訳『文化哲学の諸問題』（岩波書店、一九三七・一〇）にも「西洋の没落か復興か」（第八章）というタイトルで収録されている。この

講演でシュブランガーは、第一次世界大戦後「西洋の没落」を予言したオスワルド・シュペングラーの著作にも言及し、近代の機械的な考え方、即ち合理主義的な思考に根本的な誤りがあるとして、そうした思考から脱して「生命の法則」、即ち生命主義的な全体的思考によるべきだと説いていた。

(12) 亀井勝一郎は『現代思想概観』（三笠書房、一九三九・一〇）収録の「文学」で、シュブランガーの「西洋文化の没落か、復興か」について触れ、西洋の影響を強く受けてきた日本の知識人にとって「西欧の末期現象を詳さに伝へてくれた」と評している。

(13) 横光における〈近代の超克〉のモチーフは近代科学の超克としての「古神道」と「文学界」のシンボジウムとの関わりは拙著『戦時下の文学と（日本的なもの）——横光利一と保田與重郎——』（花書院、二〇〇九・三）で論じたので、詳細はそちらを参照されたい。